

# 介護老人保健施設入所中の要介護状態にある高齢者の 生き甲斐とサポートネットワークの現状

呉大学大学院  
讃 井 真 理\*  
呉大学看護学部  
三 木 喜 美 子

**論文要旨** 本研究では要介護状態にある高齢者の生き甲斐感の現状とサポートネットワークの現状を明らかにした。対象者9名の面接中の会話を分析した結果、生き甲斐感に繋がっているものは全員が人との繋がりを上げていた。過去の肯定感に関しては苦しいつらい状況を乗り越えて子供を育ててきたということが上げられていた。希望・期待・自分を表現することは趣味や人との繋がりに関係するものが上げられた。サポート授受の手段的サポートは新しいことを教えてもらうこと、生活全般に世話をしてもらうことの順で上げられていた。手段的サポートに比べて情緒的サポートは少なかった。サポートの提供については、手段的には自分でできることはするという形で、情緒的には相手に嫌な思いを持ってもらわないようにする、人に感謝するという形で提供していた。他者からの反応が受けられる人的環境を広げるような援助が必要である。サポートの授受を高齢者自身がポジティブに受け止められるようにケアを提供していく必要がある。消極的なサポートの提供であっても高齢者がサポート提供を積極的に行えるような場の提供がケア提供者にとって必要である。

**キーワード**：要介護，高齢者，生き甲斐，サポートネットワーク，援助

## ■ はじめに

世界一の長寿国となった日本においては<sup>1)</sup>、ゴールドプラン21で「できる限り多くの高齢者が健康で生き甲斐を持って社会参加できるよう、活力ある高齢者像を構築すること」<sup>2)</sup>が提示された。

松田(1998)は「いきいきとした老後の生活を支えるものとして重要であると考えている要因の重要度は健康，家族，趣味・生涯学習，友人・地域社会，経済的余裕，社会参加の順であった。要因の各々について施策の重要度を比較した結果，趣味・生涯学習を除くすべてにおいて高齢者の自立・社会参加の支援がもっとも重要である」<sup>3)</sup>と述べている。また，「生き甲斐が循環器疾患や心疾患に影響」<sup>4)</sup>し，「社会的ネットワークが高齢者の生命予後に影響している」<sup>5)</sup>という報告もある。一方では閉じこもり，高齢者の抑うつ，高齢者の

孤独感などの問題が取り上げられている<sup>14)~17)</sup>のも現状であり，高齢者がいかに生き甲斐を持ち続けるかについてますます関心が高まっている。

高齢者の生き甲斐に関連した研究において，Q.O.L.の質問表やモラルスケールなどが一般的に使われているが，これらは生き甲斐そのものを測定する目的で開発されたものではない。また，これら質問紙表による研究は健康な高齢者を対象としたものが多い。

生き甲斐という日本独自の概念の研究は始まったばかりで，その構造や要因についても明らかにしていく必要がある<sup>19)</sup>。さらに生き甲斐に強く影響すると言われる主観的健康感は年齢，家族構成，地域差，要介護度そしてサポート授受と提供などが関係している。

そこで本研究では生き甲斐とサポートについて，介護老人保健施設に入所中の要介護者における生

\*連絡・別刷請求先

さな い まり

〒737-0182 広島県呉市郷原学びの丘1-1-1 呉大学大学院社会情報研究科

き甲斐の現状を質的に明らかにすることとした。

■ 目的

1. 老人保健施設入所中の要介護状態にある高齢者の生き甲斐感とその対象、そしてそのサポートネットワークの現状について明らかにする。
2. 要介護状態にある高齢者の生き甲斐感とサポートネットワークの関係を明らかにするための資料とする。

■ 概念枠組

神谷(1980)は「生き甲斐について」<sup>18)</sup>の中で、生き甲斐を「生き甲斐の対象」となるものと「生き甲斐感」という精神状態との二つに分けている。また、長谷川(2001)は「生き甲斐の対象を心に思い浮かべ、同時に伴って湧いてくる自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、存在感、主動感といった種々の感情」であると述べている<sup>19)</sup>。さらに小林(1989)は生き甲斐を複合的な要素が組み合わさったもので、一番大きなものが自己実現であり、基本的欲求を土台にしているとしている<sup>26)</sup>。本研究では、生き甲斐の定義を生き甲斐の対象(過去、現在、未来に生きる楽しみを感じる

もの)とその対象から得られる感情とに分け、過去の経験や現在の状況あるいは未来へのイメージなどから、生活の充実感、達成感、人からの認知、存在価値をその人自身が感じて、生きていくための原動力となるものであるとした<sup>19)~24)</sup>。

高齢者のサポートネットワークの概念として、野口(1994)は「ソーシャルサポートはその機能的側面に着目する。しかも、すべての機能を扱うのではなく援助という機能に焦点があるのがソーシャルサポートの特徴である。」<sup>22)</sup>と述べている。また、野口は援助の相手の種類、誰にとって援助的かということ、援助の内容を情緒的と手段的に区別するなどしてソーシャルサポートを定義している。本研究ではサポートネットワークとは、構造と機能の両面をもち、その両面が複雑に作用することによって個人や組織に影響をあたえるものであり、援助の相手として家族とそれ以外、誰にとっての援助かを授受と提供、援助の内容として情緒的と手段的に分けることとした。

そして、生き甲斐と主観的健康感や幸福感は関係しており、その主観的健康感サポートの授受と提供に影響している。したがって、基本的欲求を土台にして成り立つ生き甲斐はサポートと関係していると考えられる。

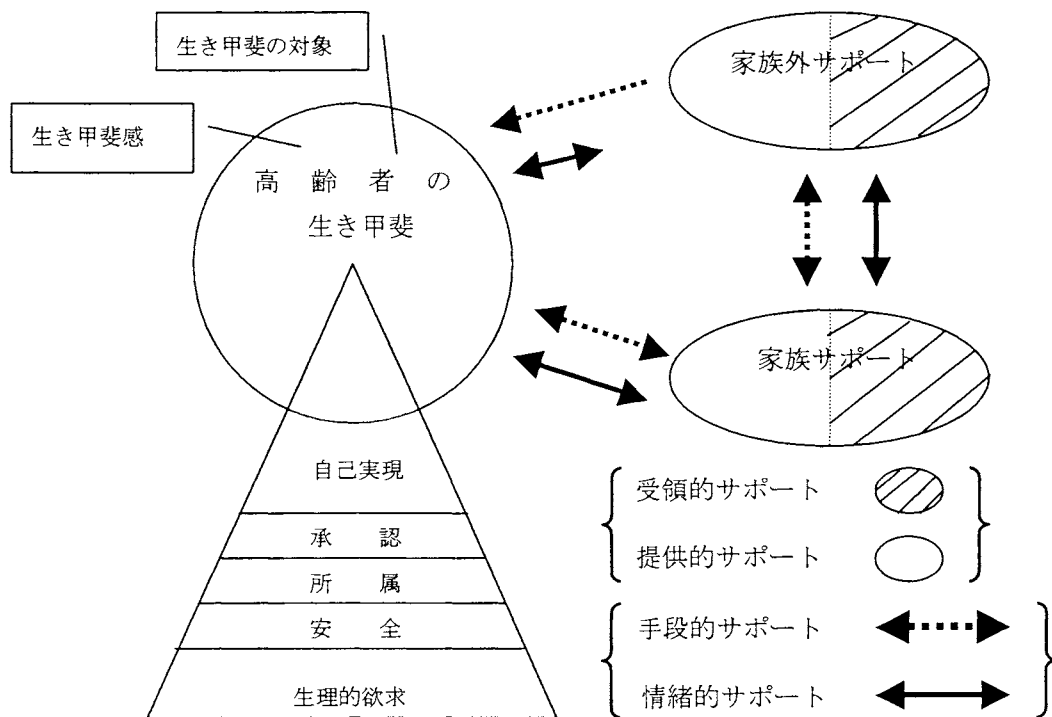


図1 高齢者の生き甲斐とサポートネットワークの概念図

## ■ 研究方法

### 1. 対象者

対象は広島県K町の、Y老人保健施設に入所中の65歳以上で、要介護状態にある者とした。対象者本人とその家族に書面と口頭で本調査の目的を説明し、同意が得られた9名とした。

Y施設は、入所ケア(80名)、デイケア(53名)、ショートステイが可能な介護老人保健施設であり、居宅介護支援事業所が併設されている。また、K町は標高220mの高原盆地であり、2000年(住民基本台帳調査)で、人口2万5千人(1995年に比べ1.8%増)、世帯数9千、老年人口割合15.5%、高齢者単身者数602人、社会福祉施設としては、地域健康センターが介護予防の拠点として2箇所、老人福祉センター及び老人集会所が高齢者の活動拠点施設として9箇所、このほか養護老人ホーム、特別養護老人ホームが各1箇所ある。

### 2. 調査方法

面接調査は、本調査者がY施設を訪問し、他の入所者がいない対象自身の部屋で、30分を目安に一人一回のみ半構成面接法を行った。面接中の会話は入所者及びご家族の許可を得てカセットテープに録音した。調査項目は、以下に示す。

#### 1) 基本的事項

年齢、性別、家族構成及び世帯形態、介護度及び寝たきり度判定基準、疾患名、デイサービス利用期間、在宅への移行状況

#### 2) 生き甲斐感について

現在あるいは過去の経験の

- ① 楽しかったこと、うれしかったこと、やり遂げたと思うこと
- ② 不安に感じたこと、悲しかったこと、つらかったこと、イライラすること

#### 3) サポートネットワークについて

- ① 頼れる人
- ② 支えてもらっていること
- ③ 支えていること

調査項目2)の生き甲斐感については、生き甲斐感を過去の経験や現在の状況などから、生活の充実感、達成感、人からの認知、存在価値をその人自身が感じている状態と考え、日常生活の中から表現できるように既存の論文<sup>7)8)11)</sup>を参考に作成した。

調査項目3)サポートネットワークについては、

サポートネットワークを構造と機能の両面をもち、その両面が複雑に作用するものと考え、対象者が自由に答えやすいように作成した。

上記調査項目は、Q.O.L質問表を参考に事前に作成した調査項目を、地域で暮らす高齢者数名の協力を得てプレテストを行った。生き甲斐という言葉など答えにくい点を考慮に入れ、既存の文献、専門家の意見をもとに作成した。さらにY施設の施設管理者、看護管理者の意見も参考にして調査を行った。

### 3. 調査期間

調査期間はH14年12月10日～12月20日であった。

### 4. データの分析

面接中の録音から逐語録を作成し、内容分析(ペレルソン)<sup>注1)</sup>の手法を用いて分析した。逐語録から類似した文章内容を集め、共通するカテゴリーを抽出・命名化した。そのカテゴリー別に文章内容を分析し数量化した。カテゴリーを抽出・命名する際は、文献との検討を行ないながら行った。また該当する内容の分類に関しては、妥当性、信頼性を高めるため本調査者と臨床経験のある看護師の2名以上で行った。

注1)ペレルソン(1957年)<sup>13)</sup>は、内容分析について

「コミュニケーションの内容に関して『何が』言われたかという分析を扱い、コミュニケーション内容の様々な面を簡明な形で記述する方法である」と論じている。「内容分析とは聴取者に向けられた刺激の、性質や相対的な強度を、客観的に示せるように、内容の記述を、より精密にするねらい」を持ち、「内容に関連した仮説に対して、適切なデータをつくるように工夫された一つのカテゴリー体系を用いて、一つの内容を数量的に分類ことを目的」としている。すなわち「内容分析は何らかの技術の助けを借りて記号ノリモノ(sign-vehicle)を分類するものと定義できる。」としている。特に内容分析の特徴として①言語の構文のおよび意味論的側面にだけ適用される。②客観的でなければならない。③体系的でなければならない。④数量的でなければならない。以上4つの特徴があることを強調している。

### 5. 倫理的配慮

研究の目的、方法と調査項目、得られたデータの管理などについて、本人と家族に書面と口頭で

説明し、同意が得られた方のみ調査を行なった。その際、調査協力は強制ではないことを十分納得した上で、本人あるいは家族が同意した。また論文中には個人が特定できるようなことにならないよう配慮した。

■ 研究結果

1. 対象者の状況(表1)と面接状況(添付資料)

対象は年齢74歳~87歳で、内6名が80歳代で、8名が女性であった。疾患名は4名が脳血管疾患、2名はパーキンソン病、2名が肺疾患であった。介護度はIが2名、IIが3名、III・IVが各2名。生活の自立度はA-1が1名、A-2が2名、B-1が3名、B-2が3名であり、全員が一部あるいは全面的な介護が必要な状態であった。施設入所期間は1ヶ月から9ヶ月で、家族構成は8名が家族と同居している、あるいは同居の予定であった。1名は一人暮らしだが家族が同居を考えている状況であった。

面接は対象の生活パターンに合わせ、本調査者が施設を訪問し、ケア、処置のない時に対象者自身の部屋で行なった。その際、室内には他の入所者、施設職員はいない状況であった。1人30分~60分の面接時間の中で、調査項目の内容をきっかけに対象の思いを引き出すようにした。

表1 対象者一覧

対象者	年齢	性別	疾患名	介護度	生活の自立度	家族構成及び世帯	施設利用期間
I	85	女性	脳梗塞後遺症(脳幹部) 糖尿病、腰痛症	II	B-1	長女夫婦と3人世帯	2ヶ月
II	86	女性	脳梗塞後遺症、糖尿病、膝関節症、鬱病	II	B-1	夫は亡くなれており、4男と同居、今後も同居予定 ただし夜勤のある仕事のため一人になることがあり、本人と家族の不安が大きい	9ヶ月
III	84	女性	心不全、気管支喘息	I	A-2	もともと一人暮らし、4年前から長男と同居 本人は娘のところに帰りたいが、長男夫婦は本人を見ることを希望	3ヶ月
IV	78	女性	脳血栓後遺症、アルツハイマー	I	A-1	一人暮らし 長女がキーパーソン、(音楽家) 長女は同居を考えているが忙しく面会が見られない状況	4ヶ月
V	77	男性	肺炎腫 アルコール依存症	II	A-2	妻と息子の3人暮らし 妻と共依存の関係、在宅療養は難しい状況	3ヶ月
VI	80	女性	糖尿病、狭心症、左膝手術、左上肢熱傷	IV	B-2	次女と同居予定だが、ADLが拡大しないと在宅は困難 外出外泊は頻回にされている	1ヶ月
VII	74	女性	パーキンソン病、子宮癌	IV	B-2	夫と二人暮らし、娘が3人おりそれぞれ独立 夫も腰痛がある、2週間程度の在宅であれば可能	5ヶ月
VIII	83	女性	甲状腺機能低下 脳梗塞(構音障害)	III	B-2	娘夫婦と3人暮らし、在宅可能、住宅改修を行い在宅に移行予定	8ヶ月
IX	87	女性	パーキンソン病	III	B-1	長男と同居していたが、長女がキーパーソンとなり同居している、2週間程度の在宅なら可能、ただし身の回りのことは一人で行っている為自己負担が大きい	6ヶ月

(倫理上家族背景については一部修正を加えて記載)

2. 施設入所高齢者の生き甲斐感の現状(表2)

面接内容で生き甲斐感に繋がっているものを分析すると、全員が人との繋がりを上げており、人との繋がりの範囲は家族・施設のスタッフ・同室者や他の施設入所者・友人の4つの項目であった。また、施設内の生活の中で楽しさを感じている人は8名で、13項目に分類できた。過去の肯定感と生活の自立心を上げている人は7名で、それぞれ8項目と5項目に分類できた。過去の肯定感に関しては、苦しいつらい状況を乗り越えて、子供を育ててきたということが主に上げられていた。希望・期待・自分を表現することは11の項目があり、趣味や人との繋がりに関係するものが上げられた。

表2 生きがいに繋がるものの構造

人とのつながり(9)	家族とのつながり(7) スタッフとのつながり(7) 同室者及び他の入所者とのつながり(6) 友人とのつながり(4)
過去の肯定感(7)	子供、孫の成長(4) 一生懸命働いてきた(3) 学校に行った(3) 習い事をした(3) 両親を見てきた(3) 旅行(2) 家を守ってきた(2) 宗教(1)
身体的な自立心(7)	自分のできることはする(2) 動けるようになったと実感する(2) 排泄(2) 着替え(1) ボケていない(1)
生活での安心感、安定感(8)	他の入所者との会話(3)いろいろな催し物(4)子供の面会(3)おやつなど食べる(2)着るものを考える(2)子供との外出(2)本を読む(1)歌を歌う(1)折り紙(1)ごみ袋を作る(1)編物(1)おしゃべり(1)家族への電話(1)
希望、期待、自分を表現する(6)	自分で選択する(2) したいときのしたいことをする(2) 孫、ひ孫の誕生(2)お金、物の管理(2) 作ったものを利用してもらう(2) 家に帰る(2) 短歌をつくる(1)作ったものを出品(1) 歌を続ける(1) 法事まで生きていたい(1) 動ける間に寝たい(1)

( )内は人数

3. 入所高齢者のサポートネットワークの現状(表3)

対象のサポートネットワークについては、サポートの授受と提供をそれぞれ手段的と情緒的サポートに分けて分析した。その結果、サポートの授受の手段的サポートは17項目あり、新しいことを教えてもらうこと、生活全般に世話をしてもらうこと、家の管理をしてもらうことの順で上げられていた。また、この手段的サポートに比べ、サポート授受のなかの情緒的サポートは項目が7項目と少なかった。

サポートの提供については、手段的サポートとして経済的支援や自分でできることはやり、人に迷惑がかからないようにするという形で提供していた。そして、情緒的には自分が相手に嫌な思い

表3 サポートネットワークの現状

サポートの授受	サポートの提供
<b>手段的サポート</b> 新しいことを教えてもらう (4) 面倒をみってくれる (3) 家の管理をしてくれる (3) 面会に来てくれる (2) 排泄の援助 (2) 洗濯 (2) 外出時の手助け (2) 楽しい時間の提供 (2) 買い物 (2) 清潔の援助 (2) 家族の面倒をみってくれる (1) 経済的な援助 (1) 入所の手続き (1) 食への提供 (1) 掃除に来てくれる (1) 褥瘡を治してもらった (1) おしゃれの手伝い (1)	<b>手段的サポート</b> 経済的な援助 (4) 自分でできることはする (4) 迷惑かけないようにする (3) 催し物の手伝い (2) ごみ袋を利用してもらう (1) 共同生活で失礼なことは注意する (1) 家族が生活できている (1) みんなの編物をつくる (1)
<b>情緒的サポート</b> やさしい肯定的な声かけ (6) 子供がちゃんと生活してくれている (5)	<b>情緒的サポート</b> 人への配慮 (6) 感謝すること (5) よけいな事 (不満) を言わない (2) 家族が良い一生が送れるように祈る (1) 人が良かったという気持ちを持ってもらう (1) 電話をかける (1) 無理を言わないようにする (1) 嫌な顔はしない (1) 心配かけないようにする (1)
話を聞いてくれる (2) 注意してくれる (2) そばにいてくれる (2) 面倒をみってくれる (1) 手紙をもらう (1)	

( ) 内は人数

を持ってもらわないように自分なりに配慮し、人に感謝するという形で提供していた。

■ 考 察

1. 老人保健施設入所中の要介護状態にある高齢者の生き甲斐感について

1) 生き甲斐を求める心(欲求)との比較

本研究では生き甲斐感を喜びや楽しさややり遂げたことは何かという、より具体的な質問で調査を行った。その結果、<人とのつながり><過去の肯定感><身体的な自立心><生活での安心感や安定感><希望や期待や自分を表現すること>の5つのカテゴリーに分類できた。神谷<sup>18)</sup>は生き甲斐を求める心(欲求)として7つの欲求を上げている。つまり〔生存充実感への欲求〕〔変化への欲求〕〔未来性への欲求〕〔反響への欲求〕〔自由への欲求〕〔自己実現への欲求〕〔意味と価値への欲求〕である。以後、この7つの欲求と本研究で得たカテゴリーと比較しながら考察していく。

①<人との繋がり>は〔反響への欲求〕と一致する。「人間は人からの反響を求めている、しかも他人に自分の存在を受け入れてもらうという性質のものでなければ生き甲斐感は生まれえない」と神谷が述べているように、自分を取り巻く人からの反響を生き甲斐につなげていると考える。人間の内在的に存在する欲求であることから、全対象から得られることは当然の結果といえる。しかし対象が施設入所中の要介護状態の高齢者であるため、人との付き合いの範囲は限られてきている。

そのため家族・スタッフ・他の入所者・友人という4項目のみという結果であったと考える。自分を受け入れてもらうという反響が必要で、高齢者がその反響をうけるためには、ケア提供者自身の高齢者に対する対応が重要になってくる。また、そういう反響を受けられる付き合いの範囲を広げられるような援助が求められていると考える。

②<過去の肯定感>は〔意味と価値への欲求〕と一致していると考えられる。神谷は「たえず自己の生の意味をあらゆる体験の中で自問自答し、確かめている、そして自己の生を正当化するものでなくては生き甲斐は感じられない」と述べている。自分が生きてきた意味を肯定的に受け止めることが出来なければ、今現在生きている意味や価値を肯定的に受け止めることは出来ないと思われる。本研究の対象は苦しくつらい過去を現在は肯定的に受け止めておられる人が多かった。このことが今の生き甲斐を感じる心に繋がっているのではないかと考える。

③<身体的な自立心>は〔自由への欲求〕と一致するのではないかと考える。ここでいう自由とは主体性、自律性の感情のことであり、要介護状態である本研究の対象にとれば、特に強く感じられる課題ではないかと考える。しかし一方ではこの自由とは反対に不自由(安定)を望む欲求があることも神谷は指摘している。つまり自分で選択しないですむという不自由さの中に身をおくことのほうが楽なこともあるという考え方である。互いは一人一人の中でバランスを保とうと働いている。このことは何か行動を起こすときの動機づけとなっていると考えられるため、援助する際は個人のこういった状況を理解した上で行うことが、生き甲斐感を感じるきっかけとなると考える。

④<生活での安心感・安定感>は〔生存充実感への欲求〕と〔変化への欲求〕に一致していると考えられる。喜び・勇気・希望などのような満たされているという感情を生存充実感といい、それは喜びだけでは感じられず、多少の抵抗感、つまり苦しみがあって始めて生の充実感を感じることができると指摘されている。このことは、この「生存充実感」は前述の<過去の肯定感>とも関連しているとも考える。そして、〔変化への欲求〕の中で神谷は「自己の生命の終わりに近づいた老人にとって、草木を育てることや、孫の相手をするのが大きな楽しみになるのは、ただの暇つぶしという意味よりもむしろ若い生命のなかにみられる

変化と成長が、そのまま自分のものとして感じられるからであろう」と述べている。〈過去の肯定感〉の中に子供や孫の成長が上げられている。日々の変化を実感しながら、その中でいろいろな楽しみを各自が感じているため、〈生活での安心感・安定感〉のカテゴリーでは13項目という多様な項目が上げられたものとする。

⑤〈希望・期待・自分を表現する〉は〔未来性への欲求〕と〔自己実現の欲求〕と一致していると考え。これからの生が新しい発展をもたらすであろうと期待するからこそ、生き甲斐は感じられると神谷は述べているが、このことは、喪失体験が重なる高齢者が生き甲斐を感じにくい状態となりやすいといえる。しかし、本研究の対象の面接内容からは、少しでも自分の可能性を發揮したいという欲求によって、死生観に関する希望や期待であってもその目標に向かって、その人なりの努力をしていることが解った。

以上、本研究の結果を、神谷の〔生き甲斐を求める心〕の7項目と比較して、考察してきたが、神谷自身も述べているように、これらは単純に分類できるような構成にはなっていない。〔生存充実感への欲求〕が〔変化への欲求〕に関連しているように、〈過去の肯定感〉が他のカテゴリーに関係しているなど、それぞれがお互いに影響しあっているものであると考え。そしてこのことは各カテゴリーを別々に考えるのではなく、生き甲斐感を求める心を統合的に捉えながらケアを提供していく必要があるということの重要性を示していると考え。

## 2) その他の文献との比較

中村ら(2002)の全国20市町村における在宅高齢者に対する研究では、「社会参加を促すことで主観的健康感が高まる」こと、また「日常生活に制限がある者や介護認定を受けている者は主観的健康感は低い」と報告している。特に消極的あるいは受け身的な身体的活動は主観的健康感に影響しないことも報告している<sup>12)</sup>。そして前田(2002)らの名古屋市近郊に在住する高齢者のQ.O.L.に対する身体活動習慣の研究では、「高齢者が身体活動量を一定以上維持することは、その後のQ.O.L.の維持・向上に有効である。」「高齢者においては身体活動を増やすことがQ.O.L.などの向上に繋がる」ことが報告された<sup>13)</sup>。本研究の対象は要介護状態であり、主観的健康感やQ.O.L.

は健康な高齢者よりも低いと考えられる。しかし制限のある中で自分にできる様々な活動に参加し、楽しみを感じようとすることで生き甲斐に対する意欲を維持することは可能ではないか考える。

山下ら(2001)による養護老人ホームの自力歩行可能者への調査では、生き甲斐の種類として家族と友人、趣味、健康があげられている<sup>9)</sup>。本研究でも同様の結果が得られた。また山下らの「生き甲斐感は身体的領域、身体的・社会的領域及び環境・娯楽・社会的活動のQOLが高い」とも報告している。本研究の対象者は施設内での生活において自分なりの楽しみを生き甲斐につなげている。このことは施設で行っているケアが対象にとって有効であり、Q.O.L.を高めていると推察できる。さらに、生き甲斐が現在ある場合にはQOLが高く、以前はあって現在は無い場合には低いという報告は、病院と在宅との中間施設である介護老人保健施設における生き甲斐に繋がるケア提供の役割の重要性を示していると考え。

## 3) 過去の肯定感と「統合」と生き甲斐

E.H. エリクソンは人生の最終段階である老年期を統合(道徳的堅実)と絶望という2つの志向の間を、英知という基本特性によってバランスをとろうとする段階であると分析している。この考え方を高橋は「内省的な意識作用の中で自らの人生を道徳的に完成したのものとして積極的な意味付けする意識と最早取り返しのつかない過去への絶望との間の緊張を英知によって克服する段階」<sup>24)</sup>であると述べている。つまり今回の結果から得られた対象の過去の肯定感という欲求は、各対象が持つそれぞれの英知によって統合され、人生の意味付けがなされ、克服されたあるいは克服されつつある状態であることを示していると考えられる。このことは過去の肯定感、つまり神谷のいう〔意味と価値への欲求〕はエリクソンのいう統合へとつながり、絶望とのバランスをとる上で重要な要素であると考え。

## 2. 要介護状態の高齢者のサポートネットワークについて

本研究では要介護状態にある高齢者のサポートを、高齢者本人がどのような状況にあると感じているかを調査している。その結果、手段的なサポートの授受が17項目と一番多い結果であった。これは要介護状態であることからサポートされている

という感覚が強いためであると考えられる。しかしその中で、新しいものを教えてもらうという項目をあげた者は4名であった。前述したように中嶋らは<sup>6)</sup>「前期及び後期高齢者でネガティブなサポートがモラルに対し負の影響を持つ傾向が強く、また受領的なサポートのうち、情緒的サポートはモラルに対し負の影響を示し、その傾向は後期高齢者でより強まっていた」と述べている。つまり加齢と共にサポートは大きく高齢者のモラルに影響していくため、サポートの授受を、高齢者自身がポジティブに受け止められるようにケアを提供していく必要がある。そして、サポート提供の結果的手段的、情緒的サポートの中にその教えてもらったことを生かすことができていることから、この新しいものを教えてもらうという項目は、高齢者にポジティブに受け止められていると考えられる。

情緒的なサポートの授受の肯定的な声かけという項目を上げた者は6名、子供がちゃんと生活しているという項目を上げた者は5名である。このことは過去の自分を肯定的に受け止め、その上で今の自分をも認めてもらうことで、ポジティブな情緒的サポートとして高齢者は受け止めるのではないかと考える。

サポート提供は手段的サポートが8項目、情緒的サポートは9項目であった。要介護状態にあるため手段的サポートには限界があるため、自分のことは自分でやり、人に迷惑をかけないようにするという方法で、自分にできるサポートを提供していこうとしている。また、情緒的なサポートでも、感謝すること、不満を言わない、無理を言わない、嫌な顔はしない、心配をかけないようになど積極的なサポートとはいえないが、自分にできるサポート提供をしていると考える。このことは、高齢者とその周りのネットワークにとって重要な意味を持っているように考える。アブラハム<sup>23)</sup>ら(2001)は「他者と自己の関係性はその人の自己概念と密接に結びついている。人々の自己イメージの維持と発展は、他者と自分自身の関係性に基づいており、さらにその関係性は、人々がどのように自分自身を見ているかによって形作られている」と述べている。消極的なサポートの提供であつてもうけた側がそれをポジティブとするか、ネガティブとするかによって、その人との関係性が発展していけるかどうかが決まる。金<sup>7)8)</sup>は「サポートを受領することは高齢者の自尊心または自

律心を損なうことになりそれが主観的幸福感と負の関係にした可能性がある」「サポートの授受のバランスが取れているほど、主観的幸福感が高い」と述べている。生き甲斐感もサポートの授受と提供のバランスに影響していると考えられる。ケア提供者にとって高齢者のサポート提供を積極的に行えるような場の提供が必要である。

## ■ 研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、施設入所中の要介護状態にある高齢者であるが、その中でも自立度のランクはAまたはBの方でありCの方はいない。またコミュニケーションがとりやすい者のみを対象とした。そして9名という少ない例数での結果であるため、施設入所の要介護状態にある者全員に、この結果を一般化することはできない。また1回のみ面接調査であり、信頼性を高める事には限界がある。

今回は現状を明らかにするまでにとどめたが、今後は生き甲斐感とサポートネットワークの関係についても明らかにしていくこと、また、対象数を増やし、要介護状態別、世帯別などさらに細かくカテゴリーを検討していき、各個人にあった生き甲斐感に繋がるケアを提供していく必要がある。

## ■ 結論

今回は老人保健施設入所中の要介護状態にある高齢者の生き甲斐感の現状と、高齢者のサポートネットワークの現状を面接調査することにより明らかにした。その結果は以下にまとめられる。

1. 高齢者の生き甲斐感は、人とのつながり・過去の肯定感・身体的な自立心・生活での安心感や安定感・希望や期待や自分を表現することの5つのカテゴリーに分類できた。
2. 反響を受けられる付き合いの範囲を広げられるような援助が求められている。また、苦しくつらい過去を現在は肯定的に受け止めることが、今の生き甲斐を感じる心に繋がっている。
3. 生き甲斐感の各カテゴリーを別々に考えるのではなく、生き甲斐感を求める心を統合的に捉えながらケアを提供していく必要がある。
4. 高齢者自身がサポートの授受をポジティブに受け止められるようにケアを提供していく必要がある。過去の自分を肯定的に受け止め、

その上で今の自分をも認めてもらうことで高齢者はポジティブな情緒的サポートとして受け止める。消極的なサポートの提供であっても高齢者がサポート提供を積極的に行えるような場の提供が必要である。

#### 【謝辞】

本研究にあたり、ご協力いただいた施設入所中の高齢者ならびご家族と、面接する機会を設定してくださった施設関係者の皆様に深く感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 国民衛生の動向：厚生統計協会，2001年，48巻第9号，p.73
- 2) 国民衛生の動向：厚生統計協会，2001年，48巻第9号，p.115
- 3) 岡戸順一，星丹二：厚生指標，49巻10号，2002.
- 4) 松田晋也他：地域高齢者の生き甲斐形成に関連する要因の重要度の分析，日本公衆性雑誌，45巻8号，1998.
- 5) 坂田清美他：生きがい，ストレス，頼られ感と循環器疾患，悪性新生物との関係，厚生指標，49巻10号，2002.
- 6) 中嶋和夫，香川幸次郎：高齢者の社会的支援と主観的 QOL 関係，社会福祉学，39 (2) 1999.
- 7) 金恵京他：高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究，日本公衆衛生雑誌，46巻7号，1999.
- 8) 金恵京他：農村在住高齢者におけるソーシャルサポート授受と主観的幸福感，老年社会科学，22巻3号，2000.
- 9) 山下照美他：施設高齢者の生き甲斐感と QOL との関係，厚生指標，48巻4号，2001.
- 10) 柳澤理子他：家族及び家族外からのソーシャル・サポートと高齢者の心理的 QOL との関係，日本公衆衛生雑誌，49巻8号，2002.
- 11) 松本清子，東條光雅：一人暮らし高齢者へのソーシャルサポートと精神的健康の関連性，日本保健福祉学会誌，7 (2)，2001.
- 12) 中村好一他：在宅高齢者の主観的健康感と関連する因子，日本公衆衛生雑誌，49巻5号，2002.
- 13) 前田清他：高齢者の QOL に対する身体活動習慣の影響，日本公衆衛生雑誌，49巻6号，2002.
- 14) 河野あゆみ，金川克子：在宅障害老人における閉じこもり現象の構造に関する質的研究，日本看護科学会誌，Vol.19, No.1, pp.23-30, 1999
- 15) 河野あゆみ：在宅障害老人における「閉じこもり」と「閉じこめられ」の特徴，日本公衆衛生雑誌，47巻3号，pp.216-227, 2000.
- 16) 増地あゆみ，岸玲子：高齢者の抑うつとその関連要因についての文献的考察—ソーシャルサポート・ネットワークとの関連を中心に—，日本公衆衛生雑誌，48巻6号，2001.
- 17) 青木邦男：在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因—地方都市の調査研究から—，社会福祉学，42巻1号，2001.
- 18) 神谷美恵子：生きがいについて，みすず書房，1980.
- 19) 長谷川明弘他：高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察—生きがい・幸福感との関連を中心に—，総合都市研究，75号，2001.
- 20) 近藤勉・鎌田次郎：高齢者の生き甲斐感スケール (K-1式) の作成及び生き甲斐感の定義 (その1)，老年社会科学，Vol.22, p.181, 2000.
- 21) 鎌田次郎・近藤勉：高齢者の生き甲斐感スケール (K-1式) の作成及び生き甲斐感の定義 (その1)，老年社会科学，Vol.22, p.182, 2000.
- 22) 野口祐二：高齢者のソーシャルサポート—その概念と測定，社会老年学，No.34, pp.37-48, 1991.
- 23) C. アブラハム/E. シャンリィ：ナースのための臨床社会心理学，北大路書房，2001.
- 24) 高橋勇悦，和田修一：生きがいの社会学—高齢社会における幸福とは何か—，弘文堂，p.50, p.10, 2002.



- 25) E. H. エリクソン, E. H. エリクソン, キヴニック：老年期—生き生きしたかかわりあい—, みすず書房, 1990
- 26) 小林司, 「生きがい」とは何か—自己実現へのみち—, 日本放送出版会, 1989

#### 参考文献

- 岩本テルヨ他：在宅老人の生き甲斐感—離島と都市部の比較—, *Quality Nursing*, Vol.4, No.1, 1998.
- 岸玲子他：前期高齢者と後期高齢者の健康状態とソーシャル・サポート・ネットワーク—農村地域における高齢者（69～80歳）の比較研究—, *日本公衆衛生雑誌*, 43巻12号, 1996.
- 森千鶴他：在宅高齢者の情緒的サポートに関する研究, *山梨医大紀要*, 15巻, pp.53-57, 1998.
- 小林江里香他：高齢者の保健福祉サービスの認知への社会的ネットワークの役割—手段的日常生活動作能力による差異の検討—, *老年社会学*, 22巻3号, 2000.
- 飯田亜紀：高齢者の心理的適応を支えるソーシャル・サポートの質—サポーターの種類とサポート交換の主観的互惠性, *健康心理学研究*, Vol.13, No.2, 2000.
- 大田壽城, 芳賀博他：地域高齢者のためのQOL 質問表の開発と評価, *日本公衆衛生雑誌*, 48巻4号, 2001.
- 芳賀博：高齢者の生活満足度 Well-being のアセスメント, *Geriatric Medicine*, Vol.40, No.1, 2002.
- 金子勇：都市高齢者のネットワーク構造, *社会学評論*, 38巻3号, 1987.
- 山本直示他：高齢者の「幸福感 (Well-being)」と「生きがい」意識を規定する心理・社会的要因の研究, *老年社会学*, Vol.11, 1989.
- 野口祐二：高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート—友人・近隣・親戚関係の世帯類型別分析—, *老年社会学*, Vol.13, 1991.
- 中本朱美, 小西美智子：高齢在宅療養者の生きがいと療養生活の受け止め方にかんする研究, *日本地域看護学会誌*, 2巻1号, pp.87～92, 2000.
- 與古田孝夫：施設入所老人の主観的幸福感と関連要因についての検討, *日本精神保健看護学会誌*, 4巻1号, p.37～46, 1995.
- ベレルソン著, 稲葉三千男, 金圭煥訳：内容分析, みすず書房, 1957年.
- E. H. エリクソン, E. H. エリクソン, キヴニック：老年期—生き生きしたかかわりあい— みすず書房, 1990.
- 辻正二, 船津衛 編：エイジングの社会心理学, 北樹出版, 2003.

添付資料：逐語録の抜粋

	楽しかったこと、うれしかったこと、やり遂げたこと	悲しかったこと、つらかったこと、イライラすること	サポート	サポートの授受	サポートの提供
I	家を守ってきたこと（庭や池の手入れなど）地区の役員をしていたこと、近所の子供が尋ねて来ていたこと 少しずつ動けるようになった、少しずつでも回復に向かっていくことが自分で分かったとき 自分で手術をしないと決めた 人に甘えないようこっそりと立つ練習をして、立てた時 ここは環境が良い 昔は子供達と買い物に行くこと、今は3時のおやつ。（糖尿だから） 着るもの考えること 子供には経済的な迷惑をかけていないこと、お金の管理をしていること 物の管理をきちっとしていること 娘の面会が楽しみ	声が出なくなったこと 動けなくなったこと オムツが取れなかったこと（恥ずかしいなあ、悪いなあ） 迷惑をかけたこと 一人での味気ない生活や留守番 行きたいところにも行けなかったこと（旅行など） 手が思うようにならないこと 面会にきてほしいと思っても、来てくれないとき、 他の入所者との関係（話が合わない、仲間に入れない雰囲気など） 家の構造上帰れないこと	娘、婿施設のスタッフ、	家族が面倒をみてあげると言っ て一緒に生活を始めた 経済的な援助 私が負担にならないようにやさしく声を掛けてくれる 自分のことを思 って注意してく れる	感謝すること 経済的な援助していること 余計なことを言わずわきま えた言動をす ないようにやさ しく声を掛けて いく、諦める 努力して迷惑 をかけないよ うにする
II	一生懸命に働いた（お手伝いさん、行商など） 息子の就職と働き続けてくれたこと 帰る家がある 5月にひ孫が生まれる 苦労がある間がええ、 まだボケていない 広告でごみ袋を作って使ってもら う（時間つぶし、リハビリ、自分もしん どくない、したいときにできる）雑巾 も40枚縫った、教えてもらった	両親と早く死に別れた、 兄弟とも離れ離れ、弟が 入院していても面会に も行けなかった 公安に追いかけられた 息子の死 経済的な面など自分が 何もできない 4男が全部背負ってい る 耳が悪いから迷惑をか ける	息子、娘 孫、ひ孫 他の入 所者、ス タッフ、	息子からの肯定 的な言葉 息子の入 所者、ス タッフ、 ここに 来る手 続きな どやっ てくれ た 息子と 娘が帰 ってと きに いろ いろ やっ てく れる 4男が みな の面 倒を よく みて くれ る、 病 気も し ない で 他 の 人 か ら ご み 袋 作 り を 教 え て ら っ た	迷惑がかか らないよ うに洗 濯も自 分です る 感謝の 気持ち 不満は 言わ ない、 認め てあ げ る 4男が いい 一 生が お く れ ま す よ う に と 祈 る 広 告 で ご み 袋 を 作 っ て み ん な に 使 っ て も ら う
III	習い事をさせてもらったこと（5歳ごろに琵琶、レース編み） ほしいものは何でも買ってもらった 短歌を作ること（新聞に投稿、新聞をスクラップする） 受験勉強したこと、学校を卒業したこと、 他の入所者の方のおしゃべり みんなに編物を作ること 孫が生まれたとき、また孫とおしゃべり、ひ孫が17人いる	自分が小さい頃から体が弱かったこと 主人が亡くなったこと（後2年で法事があるからそれまで生きていたい）主人はいろいろやってくれた 女学校時代の親友が亡くなったこと 入れ歯になった やろうと思っても出来ないとき 体が弱く外にあまり出れないこと 刺激が少なくて土臭い短歌が作れないこと	主人娘、 息子、 孫、ひ 孫、他 の入 所者、 同窓生、 先生、 婦 長さん、 看 護 婦 さん、	体が弱 いから 学 校の 送 り 迎 え も や っ て ら っ た し、 主 人 に 掃 除 洗 濯 を や っ て ら っ た 大 事 に 育 て て も ら っ た 看 護 婦 さ ん に も 良 く し て も ら う 先 生 に 世 話 に な っ た 婦 長 さ ん に よ く し て も ら っ た （無 理 し な さ ん な ど 声 を か け て く れ る）	金銭的なこと（お年玉、冠婚葬祭） 主人の法事を済ませること 孫に数学を教えていた 家族への感謝の気持ちを短歌にする
IV	娘がやりたいということを見せて学校に行かせたこと 自分も学校をでて仕立てて何でも縫えたこと 3つ上の姉を助けて、近所の子にでも	姑さんが厳しい人で・・・ 強制疎開をさせられたこと、2日かかって山を越えたこと、泊まるどころもままならなかった	姉、娘、 他 の 入 所 者、 息 子、 嫁、 同 窓 生	姉が家の管理をして いる 娘に相談する 計画書を作 って く れ る	金銭面を援助して きたこと 友人に入院していることは 言わない、心配

	<p>向かっていったこと、今でも気性が激しいこと、しかし裏表がないこと 勉強で地理はよかったこと 娘が優等生だったこと 子供を認めてきたこと子供達がちゃんと人に迷惑かけないで生活していること 家族と外食に出ること、 お父さん(夫)が残したお金を自分のために使うように言ってくれたこと 一日を無事息災に過ごさせてもらうこと 週の計画書に色を塗ること(几帳面に) 他の入所者(4人)と生活すること</p>	<p>こと、原爆にあったこと、疎開先で親切にされなかったこと、 帰ってから大変だったこと 夫の死  トイレを汚す人がいる</p>			<p>するから 年賀状がきた人には出して、 来ない人には電話をする お嫁さんへ配慮して、みんなに外食をさせてあげること 共同生活で失礼なことは注意してあげる</p>
V	<p>歌が好き、教えて下さる、安心して歌える、人様の前で歌を歌う、本格的な歌を声楽の先生に教えてもらえる、自然に勉強ができる 先生との出会い 仕事もし、遊びもした、 とにかく今は歌、原語で習って、大変だったけど大分覚えた 自信がもてた ここから帰ってもどこかで習ってまだやりたい 歌うときは酸素をはずすが、もう倒れても良いわと思う、それでも倒れない、呼吸にいい、まあ倒れても先生がいるから安心 恋もしている、 いいと思うことは積極的にすること、 みんなも何かしたらいいと思う、おしきせでなく自分に合うものを・・・ 他の入所者と話をすること、みんな初めて聞くような話を先頭切ってる</p>	<p>知らないうちに年をとっていた 痴呆の人ばかりのところ 自分で自分には場違いなところと思った 若い頃に帰りたい 失敗したなあということもある 忘れることがいい HOTがあるために時間が限定される、 酸素をしないで動いたらそのときはどうもなくても後が苦しくなる  頼れるのは今は先生 女房は体が丈夫じゃないし、息子は当てにならない  自由に外に出れないのが残念、家族がいたら出れるが、滅多に来ない</p>	先生、職員、妻、息子	<p>教えてもらう、苦しくないかどうか観察してもらえ先生が引張り出してくれた 頼れるのは今は先生</p>	<p>字を書いてあげる 人様が良かったという気持ちをもってくれたらいい  家族が生活できている</p>
VI	<p>年をとってからもおしゃれはいい、マニキュアは手が感じがいい、お化粧するのが楽しみ、純毛で質の良いかつらでセット、たまにはシャンプーしてウェーブをだしてもらう 2時からのいろいろなレクリエーション おやつが楽しみ 部屋からトイレが近いプザーを押せば来てくれる 買い物に行き洋服などを買う</p>	<p>足が悪くて立って歩けない、かかどに褥創ができた 主人の死、主人に何か作ってお膳で運ぶ夢を見る 病院を変わる時、ここ変わるの嫌 男の人にオシメしてもらうこと 車椅子をこぐのが難しい 正月に家に帰るとトイレが難しい夜はオムツ替えてもらう、寝返りが安全にうてない、糖尿があるから食事に気をつけてインシュリンが必要、血糖を計らないといけない</p>	娘、嫁、息子、先生、スタッフ、同居者	<p>嫁さんが洗濯物を取りに着てくれたり、お使いを頼んだり したってくれる 娘に買い物に連れて行ってもらう、 オムツを替えてもらう 着替えさせてもらう 食べ物の心配はしなくていい トイレに連れて行ってもらう</p>	<p>娘への配慮 経済面の援助</p>
VII	<p>本を読むのが楽しい、自叙伝を読んで どういう風に感じられたのかを知る、 新聞を読むのが楽しみ 娘達が持ってくるのが楽しみ 折り紙をするのが楽しい、文化祭に出品した、クリスマス会は楽しかったです よ 孫が着てくれて、婚約者もつれてきてくれた</p>	<p>主人がだんだん弱ってくるのを見るのがかなしい、主人の健康が心配、姿を見るのがかなしい 自分が不自由になっていくことが悲しい 声も出なくなって、顔の表情もでなくなった、筋</p>	主人、娘孫、先生、スタッフ、同居者	<p>つらいときには聞いてくれる ナースコールをしないと言ってくれる、だから安心して眠れる 折り紙を教えてもらった 主人に支えても</p>	<p>夕食後に主人に電話する 無理を言わないようにしている</p>

	<p>主人と自分の両親をみんな最後までお世話した、やるだけのことはやってきた</p> <p>夕食の後主人に電話するのが約束で、電話をすると主人が安心する</p> <p>孫達が成長していくのを見るのが楽しみひ孫が4月に二人になる</p> <p>やさしい女の子3人でよかったです主人も言ってくれる、子供も立派に生きていますよ、娘が呼んでくれている、言ってくれるだけでもうれしい</p> <p>まだ調子のいいときのほうが長いから我慢できる</p> <p>女学校の同窓会があって写真を送ってきてくれた、ときどき手紙をくれる</p>	<p>肉がひきつる、変形もしていく</p> <p>自分が死んだらがっかりするだろう、主人を看取ってからと思うが出来ないだろうから残念</p> <p>この一週間体がこわばる、こわばる範囲が広がってきた、布団一枚が石のように感じる</p> <p>兄弟だいたいことが寂しかった</p> <p>娘にやかましく言っていて、今考えると悪いことしたなと思う</p>		<p>らっている、本や新聞を持ってきてもらう</p> <p>やさしい言葉が一番いい</p> <p>友人に手紙をもらおう、がんばれ頑張れと書いてある</p>	
VII	<p>家を直してもらっている</p> <p>お参りが楽しみ、20年間お参りを続けた</p> <p>女学校をでた、兄弟みんな卒業した、お茶とかお花を習った</p> <p>重役さんから事務所でお勤めをしてくださいといわれた、休まず70年お勤めしてきた</p> <p>杖一本でどこへでも老人会などの旅行に行った、</p> <p>主人は上のほうの人で、物のない頃にもいい生活をして家族に送金もしていた、いろいろ買い物をした</p> <p>いろいろなことを教えていただいている、友達も沢山いる</p> <p>4人の子供が学校を卒業しないうちに主人がなくなっても子供を育ててきた、子供が大学で就職した、孫も生まれて学校で就職した、子供も家を建てた</p> <p>クリスマス会にみんなを来させてもらった、ここは楽しい</p> <p>週の計画表に色を塗る、手伝いというほどでもない</p> <p>4時になったら起きて、自分で着替える、一日一日が過ぎればそれでいい</p>	<p>急に病気で自分は何もできない、役にはたたない</p> <p>主人の死言葉もわからない</p>	<p>子供、孫、先生、スタッフ、老人会</p>	<p>娘達にやってもらおう</p> <p>ここでいろいろなことを教えてもらおう</p> <p>娘が掃除をしにきてくれる</p>	<p>感謝の気持ち</p> <p>子供を育ててきた</p> <p>お参りしてきた</p> <p>看護婦さんへの配慮</p>
IX	<p>旅行に行くことが楽しみだった、おいしいものを食べる</p> <p>若い人にかわいがられることが一番の希望</p> <p>かわいがられないと損</p> <p>厳しい姑さんに対して辛抱してきたこと、どうにかやってこれた、今ごろとは違う</p> <p>洋裁や和裁、お茶お花を習っていないと恥だった時代、ミシンなどで何でも縫った</p> <p>スポーツが好きだった、45歳まで選手をしていた、いつも一位だった、出てくれと頼まれた、おてんばだった、今でも気持ちは消えない、頑張ろうと思う</p> <p>頑張る屋だということでモデルになって他国に紹介された</p> <p>起きたら足をさすって動かすように気持ちを捨てないようにしている</p> <p>同室者と仲良く穏やかに過ごしたいと思っている</p>	<p>足が悪くなって旅行に行けなくなった</p> <p>若い者が病気になるって先に亡くなったらどうすればいいのだろう</p> <p>厳しい姑さんを抱えてきたこと</p> <p>主人の死</p> <p>今ごろは年寄りが小さくなってないといけない時代</p> <p>面倒をみるという娘と息子のどちらを断るか困っている</p> <p>面倒がられるとつらい、乱暴にされるとつらいだろうと思う</p>	<p>お嫁さん、息子、娘、同室者、スタッフ</p>	<p>主人が支えてくれた</p> <p>部屋の人や事務所の人(スタッフ)によくしてもらおう</p> <p>何でもやってもらおう</p>	<p>息子よりもお嫁さんに(お金)をあげる、息子と仲良くしていたらお嫁さんがいい感じはしないだろう</p> <p>人のためになることは少しでもやりたいと思う</p> <p>感謝の気持ち</p> <p>昔とは違う、苦い顔ばかりしてはいられない</p>